

中国語の発音習得のための「イメージ教授法」の構築に向けた事前研究 (三) — 短音節語の声調コントロールについて —

武村朝吉

要約

本稿は、中国語短音節単語及び発話時の基本周波数 (F0 値) を解析し、日本人学習者が中国語の声調を習得してゆくための基盤となる調域と調値を特定した。それに基づいて、調域の拡大、並びに四種の声調の調型と調値を正確にコントロールする能力を調域とスムーズに獲得できるよう、そのコントロール技術を「イメージ教授法」としてまとめた。

序

中国の共通語である“普通話”(以下「中国語」)は声調言語 (Tone Language) として、その音節構造は、声母 (子音) と韻母 (母音、あるいは更に n, ng を加えたもの) に声調が合わさって始めて弁別作用を担うという特徴をもつ。中国語の声調は第1声、第2声、第3声、第4声と、それらが短く変化した軽声があるのみである。一見単純そうに見える声調が、その実、中国語学習者にとっては極めて越え難い高いハードルとなっている。

筆者は、日本人中国語学習者が、中国語の発音をスムーズに習得し得る効果的な教授法 - “イメージ教授法” - 「できない」から「できる」に転じさせる契機となるイメージを付与することのできる教授法の構築を目標としている。本稿では、単音節単語の声調の発音にテーマを絞って考察した。

なお、中国語の発音という概念は通常声母、韻母及び声調を一まとまりの音として発することを意味すると思われるが、本稿においては、声調に焦点を当てるため、便宜上、音節を構成する声母及び韻母の音を発することを「発音」とし、声調に係るものを「声調コントロール」と表現する。

1-1. 先行研究

中国語の声調に関する研究は、中国はもとより、日本、西欧諸国においても盛んに行われている。

中国における声調研究は、千年以上も遡るといわれる¹が、1930年代には、西欧留学によって言語音声学の先端知識を得た劉復や超元任等によって長足の進歩を遂げた。中でも超元任は中国における言語音声学の創設者として高く評価され、氏の示した“五度標記法”

は80余年を経て現代なお踏襲されている²。中国においてはその基盤の上に豊富な研究成果が蓄積されているが³、昨今の世界的な中国語学習熱の高まりに伴い、対外国人中国語教育の専門分野である“対外漢語教学”領域の研究者等による外国人学習者の声調コントロールの間違い分析、第二言語習得や認知言語学的なアプローチからの研究も多い。同様に、我国においても多くの研究成果があるが、特に近年は、実験音声学領域に優れた研究成果が多く見られる。それにも拘わらず、最も多くの中国語学習者をあずかる中国の“対外漢語教学”の研究者からは声調教育が順調なものとなっていないことを指摘する文献が後を絶たない⁴。

1-2. 声調教授法の現状

中国語の声調コントロールの教授法は、声母・韻母に声調コントロールの難しさが合わさった声調自体の難しさの所以からか、従来本場中国においては、教師が模範を示してそれに倣わず模倣型が主流を占めてきた感があるが、近年は研究成果の蓄積により、改善の必要性が指摘されている。我国の中国教育の現場も概ね中国のそれと近い状況にあると思われるが、散見される教授法の中で、VT法による指導法が目を引く。

胡玉華 (2003) 及び胡玉華・宇野忍 (2005) は、鈴木義昭 (1996) で紹介された「VT法⁵による指導法 (以下「VT法」)」に若干の修正を加えた上で大学の授業に導入し、短音節、2音節、3音節の声調学習に対する効果を検証している。その結果は、極めて短期間で、学習者がそれら声調の弁別能力とコントロール能力を身に付けることに成功したという内容となっている。VT法の拠り所とする言調聴覚論の説くところが人間の習性に根差したものであることに鑑みると、い

ささか説得力も感じさせられるが、中国語教育の現場で多くの学習者が声調コントロール能力の獲得に苦慮する実情からすると、数値がやや大き過ぎる感が否めない。

これまで、中国の多くの文献によって、外国人中国語学習者（在中国外国留学生）の声調コントロールの過ちは「調域」「調型」「調値」にあると指摘されている。それら文献は、日本人学習者の犯しがちな間違いについては大体以下のように述べている⁶。

第1声：調値が44あるいは33と低くなる。また、調型も水平を維持することができず、上下に傾いてしまう。

第2声：調値が上がりがらず34、あるいは24、または324となってしまう。調型も傾斜が不十分であったり、逆に第4声のように下に傾いたり、第3声のように弧を描くこともある。

第3声：調値が下がりきらず、32あるいは33となってしまう。よく第2声と混同される。

第4声：下がりきらず、調値が42や31となってしまう。

2-1. 声調コントロールのより効果的な教授法を求めて

中国語の声調コントロール能力を獲得するプロセスは、その音韻学的特長からして、先ず音節を構成する声母と韻母の正確な発音を習得し、その後声調コントロール能力の習得へという二段階を経なければならないはずである。そのプロセスを素通りしてしまった場合、声母・韻母構造の発音に難渋し、声調をコントロールする集中力が十分に発揮できない状況に陥ってしまうことが推測される。

また、早くから指摘されているように、声調自体のメカニズムを解明するためには、多くの小波の複合体が大波を形声する“波”の姿を求めるように、小波と大波の研究、並びに両者の統合も必要となろう。

2-2. 小波の解析

筆者は以前、四声の動きの全体像を見るため、280サンプルの音声分析データを解析し、図1を得ている⁷。また、今回も日中両言語の発声域の差を見るため、音節構造が近似する中国語の【他 (tā)】と日本語の【た】の基本周波数（以下「F0値」）の調域を解析し、それ

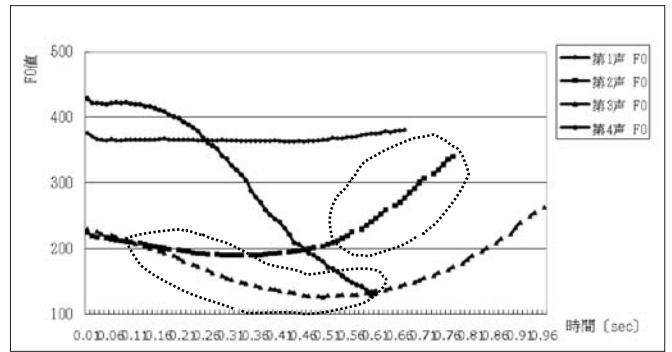


図1 実際の時間幅を反映した声調モデル曲線

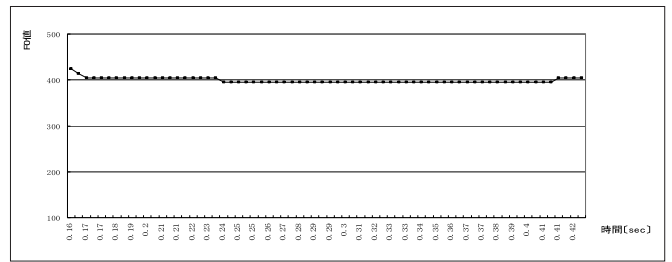


図2 中国語の【他 (tā)】のF0曲線

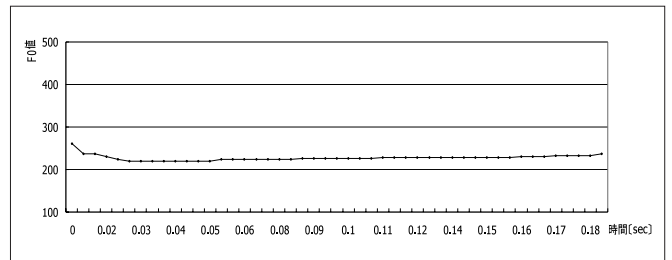


図3 日本語の【た】のF0曲線

ぞれ図2、図3を得た。

図1からは、四種の声調の動的推移は、必ずしも“五度標記法”と一致しないことが分かる。また、図2及び図3からは、日本語の【た】と中国語【他の (tā)】のF0値がほぼ同様に水平に推移している状況が確認されるが、両者のF0の平均値がそれぞれ227と399となっており、大ざっぱに言えば、日本語の【た】は中国語【他の (tā)】に比べ約半分のF0値であるといえる。

2-3. 大波の解析

今回は更に、中国語の声調のもつ横方向の調域（時間幅）を具体的に理解するため、中国語と日本語のネイティブ話者の発話を解析した。

中国語と日本語のネイティブ話者の発話の解析

サンプル収集

インターネット上で聴取できる A 及び B のラジオニュース中の発話を同一条件 (周波数44100Hz、16ビット) で録音しサンプルとした。

A : “北京广播电台 (ラジオ局)” ニュース中の発話
男性アナウンサー : 「今天是二零一二年一月四号星期三」

B : NHK ラジオニュース中の発話
男性アナウンサー : 「7時のNHK ニュースです」

まず両サンプルを音声分析にかけ、図4及び図5を得た。更にそのデータを解析処理し、“五度標記法”に当てはめてみた。なお、音声データの分析、及び統計処理は、音声分析・合成ソフトウェア「音声録聞見 for Windows」とマイクロソフト社の excel を用いて、以下のプロセスで行った。

音声分析ソフトによる音声分析

両サンプルを音声分析にかけて図4及び図5を得た。両サンプルを再生速度0.5倍速に加工して聞き取りやすくし、再生ソフトの音声波形と図4・図5上の音声波形を対照比較しつつ、各音節の位置を特定した。

ピッチの表れない部分の抽出

ピッチが表れない部分 (以下「無ピッチ部分」) を特定し、その時間幅を算出した。

データの F0 値を“五度標記法”に合わせて修正した。

声調モデル曲線の描画

の処理で得たデータをグラフ描画し、図6及び図7を得た。

なお、F0 曲線の描画に際しては、小波が前後の小波の影響、あるいは大波の作り出すうねりの影響を受けて変化する状況を観察する必要性を考慮し、音節毎の声調を抽出するためのセグメンテーションはあえて行わなかった。

解析結果

中国語「今日は二零一二年四月一星期三」及び日本語「7時のNHK ニュースです」の解析結果は以下のとおりであった。

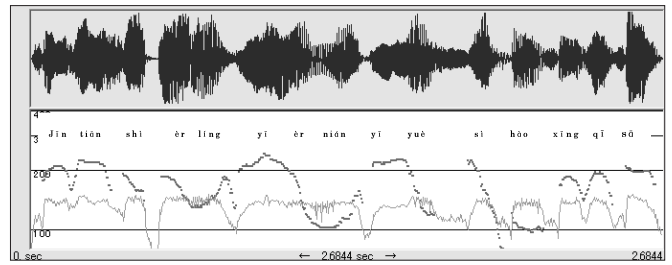


図4 発話時の F0 曲線：中国語「今日は二零一二年四月一星期三」

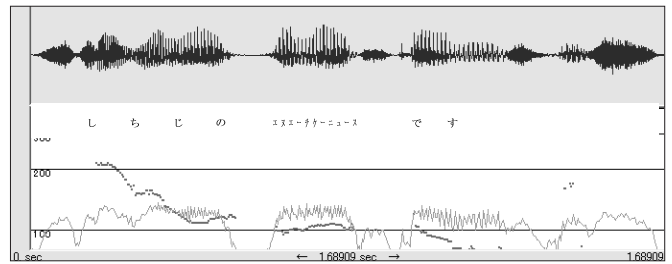


図5 発話時の F0 曲線：日本語「7時のNHK ニュースです」

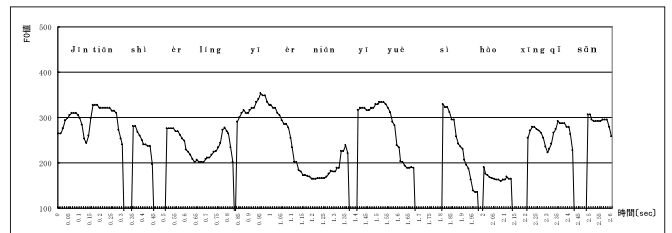


図6 発話時の F0 曲線：中国語「今日は二零一二年四月一星期三」

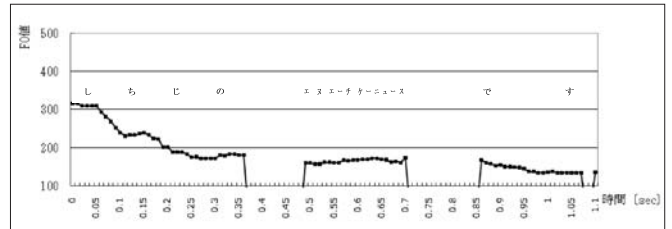


図7 発話時の F0 曲線：日本語「7時のNHK ニュースです」

無ピッチ部分の時間幅の計測結果 (出だし部分は他の要因も考えらるため削除した)

中国語：

- Jīn [0 sec] tiān [0.04 sec] shì [0.06 sec]
- èr [0 sec] líng [0.01 sec] yī [0 sec] èr [0 sec]
- niǎn [0.04 sec] yī [0 sec] yuè [0.13 sec]
- sì [0.02 sec] hào [0.07 sec] xīng [0 sec]
- qī [0.06 sec] sān.

中国語の発話 (15音節) 全過程の所要時間は [2.6 sec] で、その内、無ピッチ部分の合計時間幅が [0.39

sec]、発話部分のみが [2.17 sec] で、1音節毎の時間幅は [0.14 sec] であった。

日本語：

[0.04 sec] し [0 sec] ち [0 sec] じ [0 sec] の
 [0.12 sec] エ [0 sec] ヌ [0 sec] エ [0 sec] -
 [0 sec] チ [0 sec] ケ [0 sec] - [0 sec] ニュ
 [0 sec] - [0 sec] ス [0.15 sec] で [0.02 sec] す。

日本語の発話（16音節）全過程の所要時間は [1.58 sec] で、その内、無ピッチ部分の合計時間幅が [0.29 sec]、発話部分のみが [0.81 sec] で、1音節毎の時間幅は [0.05 sec] であった。

上記のデータから、孤立言語の特徴であると思われるが、中国語は単語毎に“間”があることが分かる。それでも、1音節毎の発声時間幅は [0.14 sec] と長く、日本語の約3倍となっている。なお、無声子音の場合も単語構造の中にあっては無ピッチ部分が表れていないものも見られる。また、縦の発声域を見ると、中国語の場合は、音域が深く、かつ躍動感のある変化が見られる。

一方日本語は、無声子音が存在しているにも関わらず、無ピッチ部分が表れるのはほぼ助詞の後と、断定を表す強い語気を持つ助動詞「です」の部分に限られている。それにも関わらず、1音節毎の発声時間幅は [0.05 sec] と極めて短い。更に、発声の出だし部分を除いて、発話が殆ど変化のない低いピッチで推移している状況も、日本語の大きな特徴であるように思われる。

3-1. 声調コントロールのための基本的考察

まず、上記の解析結果から、日本語ネイティブのもつ音節毎の発声域は、発話の推移を見ても殆ど変化が見られず、縦方向に浅くかつ横方向も極めて狭いものとなっていることがいえる。従って、日本人が中国語を学ぶ場合、中国語の声調を描くために必要な広さのキャンパス（図8の“五度標記法”の外郭）に比べ、あまりにも狭く小さなキャンパス（図8上の破線の四角形）しか持たないという大きなハンディを背負っていることになる。前述したように、前提条件としての声母・韻母構造の発音の習得は無論のこととして、日本人学習者が声調コントロールを習得するために最も

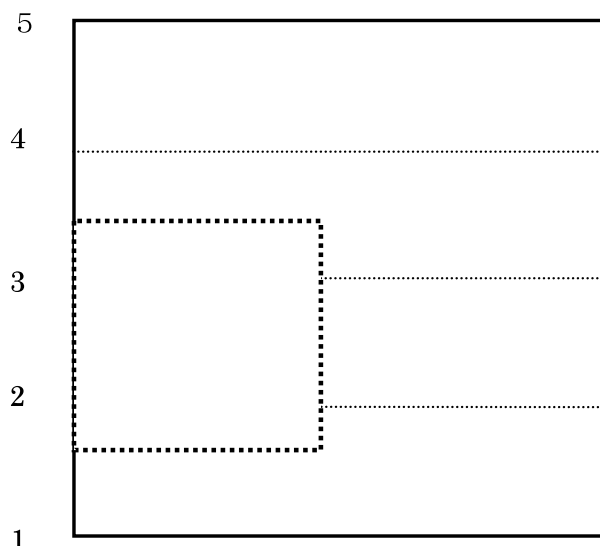


図8 中国語話者と日本語話者の発話領域

必要とされる留意点は、そのキャンパスの外郭を中国語のその広さまで広げること努めることであといえよう。その注意を怠ることが、声調コントロールの様々なミスを引き起こす根本的な原因になっていると考えられる。例えば、第1声の調値が低くなる、第2声上がりきらない、第3声下がりきらない、第4声の出だしの調値が低くかつ下がりきらないなど、多くの声調コントロールのミスもそこに起因していると考えられる。

3-2. 第2声と第3声を区別するために

前述のように、図1から実際の声調の動態的推移が必ずしも“五度標記法”と一致していないことが分かるが、特に、第2声と第3声の調型が近似し、多くの中国語学習者がそれらを混同する実情がそこに起因することを示している。その近似する両者の調型の中に著しい違いを表す部分を探すとすれば、それは破線の圏内、すなわち第3声が弧を描いて底まで下降する部分と、第2声が急傾斜で上昇している部分であると考えられる。そこを強調することで両者の弁別、並びに声調コントロールが上手くゆくと期待できる。なお、第二声も弧を描き、上昇しているが、それは発声器官の運動能力によるものと推測され、声調コントロールの練習に用いるイメージとしては“五度標記法”の与えるイメージの方が効果的であると思われる。

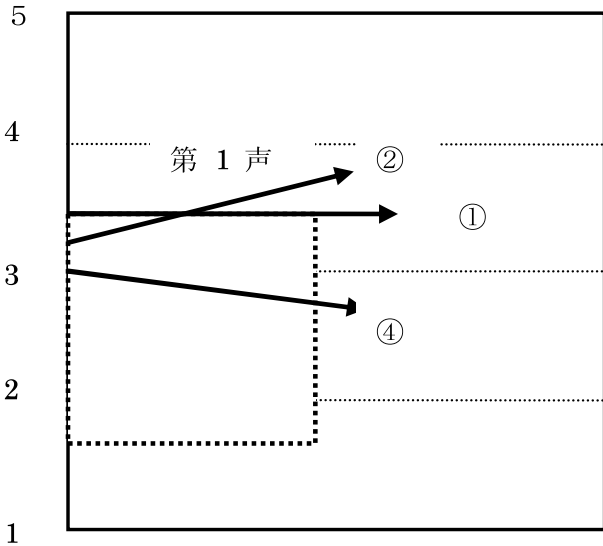


図9 第1声の声調コントロール

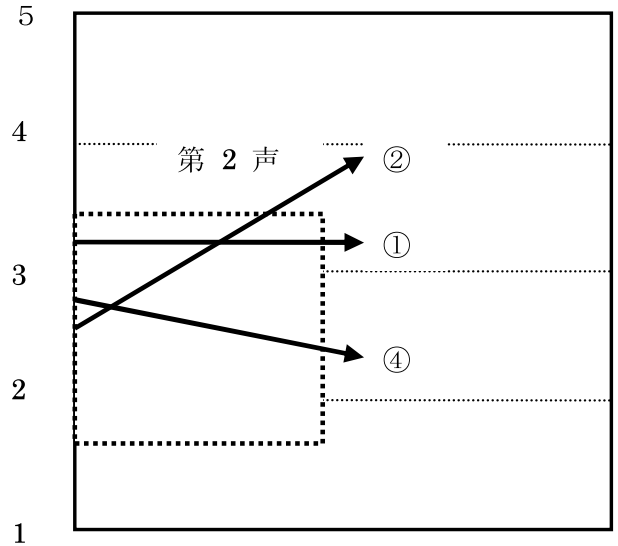


図10 第2声の声調コントロール

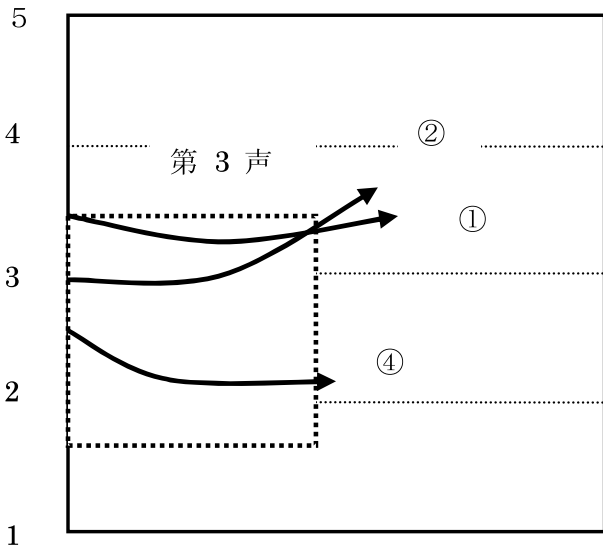


図11 第3声の声調コントロール

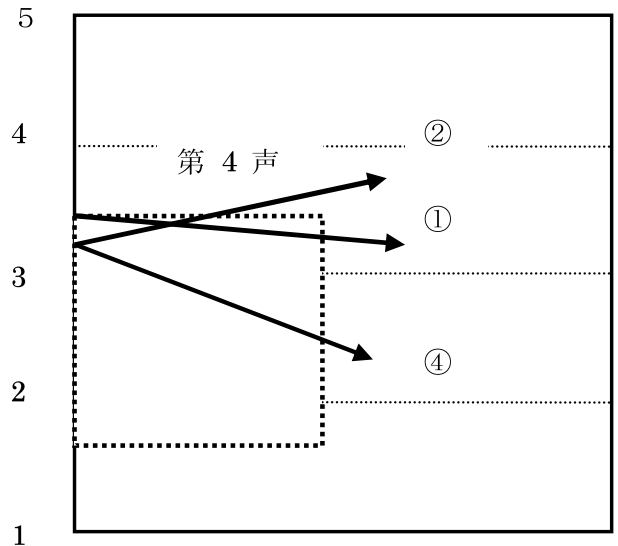


図12 第4声の声調コントロール

3-3. 四声の声調コントロールが混同されやすい理由

狭い発声域しか持たない日本人学習者が第1声を発した場合、仮に図9の のように調型を水平に維持し得たとしても、ネイティブに比べ調値が低く、かつ調型も短いものになってしまう。図9の のように、調型が水平な状態を維持できず上向きになってしまうと、調型が図10の と近似し第2声と混同される。図9の のように調型が下向きになってしまうと、図12の と区別が難しくなる。同様に、他の声調のコントロールミスについても、図9、図10、図11、図12のように視覚的イメージとして確認できる。

4. まとめ

中国語学習者が中国語の声調コントロールを習得してゆくプロセスは、表層的な部分においては、その能力を獲得する結果として、発声器官を操り正確な発声を行えるようになる変化の過程であるといえよう。しかし、深層部分においては、それを認知しかつ発声させ得る、聴感覚器官及び発声器官の司令塔としての脳内回路網を構築するプロセスであると考えられる。言調聴覚論の説く言語外要素を用いることの効用も、それを構築するための方法論的有効性であると理解できる。故に、学習者は用いる術の別を問わず、究極的には集中力を脳内に向けなければならず、それを伴わない身体的補助動作は時に逆の効果を生む危険性を秘め

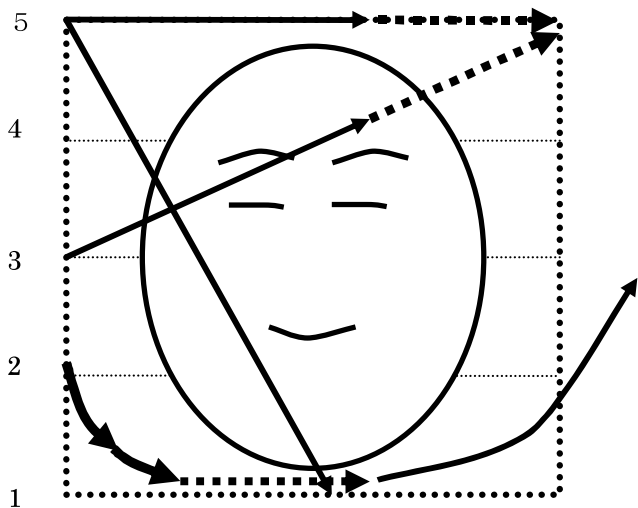


図13 声調コントロールのイメージ

ているものと思われる。例えば、中国語の初級クラスにあっては、学習者は誰から促されるのでもなく無意識に声調コントロールに合わせて首振り動作を行うことが多いが、首だけが上下し、声調の動態変化が殆どない状況も少なくない。そのような場合、身体を固定し、音に集中してもらうことによって、目的を達成できたことも多い。要するに、言語外要素を用いること自体が重要なのではなく、何を構築するのかという「目的」に集中し、そのプロセスをスムーズにする効果的な方法論を用いることが重要なのだといえる。

筆者が目指す「イメージ教授法」は、学習者が「できない」から「できる」へ移行するのに必要とする特定の能力、その能力の獲得に際して、具体的に何を獲得するのか事前にイメージできるようにするための教授法である。上記のように、学習者が集中力を脳内に向けることが肝要であること、並びに学習者がクラス内の座学で声調コントロールを習得しなければならないという点を考慮し、以下の声調コントロールの方法を提案する。

声調コントロールの練習においては“五度標記法”に頭部をはめ込んだイメージをベースとする。

第1声は、調域を広げるため、頭の上で音を水平に発し、それを長く伸ばすようイメージする。同時にこの練習を繰り返すことで、調域の上限の調値をしっかりと固定することをイメージする。

第2声は、一気に上昇させ、後半部分は、矢印のように上がってゆく線路上の滑車を最後まで押し上げるようなイメージで音を上昇させる。その後半のあと一

押しの部分が第2声の弁別機能を担う重要な個所であることをイメージする。

第3声は、音を下げることが実は相当難しいことを説明した上で、引っ張り下ろすようなイメージで下降（あるいは、咽頭を奥に引っ込めるように発声する）させ、その後失速させるイメージで重低音を発する。“半上声”の場合は失速させて完了、“全上声”を発する時は、重低音を水平に伸ばした後に末尾を上げるイメージで。また、第3声を底まで引き下げることによって調域を下方向に広げることができ、調値の下限が固定されるとイメージする。

第4声は、ジャージの上着のファスナーを瞬時に引き下げのように、抜くように落とすイメージで瞬間的に下げる。または、跳び箱の踏み台を思いっきり踏み込み次の音節の発声に弾みをつけるようなイメージで発する。

註

- 1 刘俐李 (2004) 二十世纪汉语声调理论的研究综述 (当代语言学), 6, (1), pp.45.
- 2 刘俐李 (2004) 二十世纪汉语声调理论的研究综述 (当代语言学), 6, (1), pp.46.
- 3 毛世楨・曾玉萍・沈倍蕾 (2004) 普通话声调研究综述 (第二届全国普通话水平测试学术研讨会论文集), pp.437~484.
- 4 关键 (2000) 声调教学改革初探 (语言教学与研究), (4). その他.
- 5 VT法 (Verbo-tonal Method): 音声言語を言語外要素 (場面、状況、身ぶり、表情、情緒) をも含む全体構造として捉えるクロード・ロベルジュの言調聴覚論 (Verbo-Tonal System) を基礎とした発音指導方法で、身振り手振りを強調する。
- 6 马燕华 (2000) 初级汉语水平留学生的第三声听辨分析 (北京师范大学学报 (人文社会科学版)), (6). その他.
- 7 武村朝吉 (2011) 「中国語の発音習得のための「イメージ教授法」の構築に向けた事前研究 (2) - 1音節単語の声調を中心に -」『沖繩キリスト教短期大学紀要』39, pp.97-103.

引用文献・参考文献

1. 中国
 - ・長谷川良一 (1990) 日本学生学习汉语语音上的几个问题 (第三届国际汉语教学讨论会论文集).
 - ・马燕华 (1994) 初级汉语水平留学生的普通话声调误区 (北京师范大学学报 (社会科学版)), (3).

- ・宮本幸子(1996) 日本人学习汉语声调 (第五届国际汉语教学讨论会论文集)。
 - ・朱川主编(1997)《外国学生汉语语音学习对策》, 语文出版社。
 - ・何平(1997) 谈对日本学生的初级汉语语音教学 (语言教学与研究), (3)。
 - ・崔立斌(1997) 对日汉语教学研究的现状 (北京师范大学学报(社会科学版)), (6)。
 - ・王韞佳(1997) 阳平的协同发音与外国人学习阳平 (语言教学与研究), (4)。
 - ・将以亮(1998) 语流教学初探 (语言教学与研究), (4)。
 - ・将以亮(1999) 音乐与对外汉语的语音教学 (汉语学习), (3)。
 - ・关键(2000) 声调教学改革初探 (语言教学与研究), (4)。
 - ・马燕华(2000) 初级汉语水平留学生的第三声听辨分析 (北京师范大学学报(人文社会科学版)), (6)。
 - ・何丽静·王阳(2000) 论对外汉语语言教学中“声调”的纠偏 (北京联合大学学报), 14。
 - ・姜晓红(2001) 关于对外汉语声调教学的一些思考 (宁夏大学学报人文社会科学版), 23, (3)。
 - ・王汉卫(2002) “标准”与“基础 - 基础阶段对外汉语语音教学的新思考 (暨南大学华文学院学报), (2)。
 - ・毛世楨·曾玉萍·沈倍蕾(2004) 普通话语调研究综述 (第二届全国普通话水平测试学术研讨会论文集)。
 - ・刘俐李(2004) 二十世纪汉语声调理论研究综述 (当代语言学), 6, (1)。
 - ・涩谷周二(2005) 日本学生汉语学习难点和重点的调查报告 (汉语学习), (1)。
 - ・池杨琴(2005) 对外汉语声调教学研究述评 (解放军外国语学院学报), 28, (1)。
 - ・王安红(2006) 汉语声调特征教学探讨 (语言教学与研究), (3)。
 - ・彭玉康·胡袁圆(2006) 对外汉语声调教学研究回望 (暨南大学华文学院学报)。
 - ・金立鑫(2006) 试论汉语国际推广的过激策略和学科策略 (华东师范大学学报(哲学社会科学版)), 38, (4)。
 - ・周芳(2006) 对外汉语语音研究与语音教学研究综述 (云南师范大学学报(对外汉语教学与研究版)), 4, (2)。
 - ・李倩·曹文(2007) 日本学生汉语单字调的阳平与上声 (第九届全国人机语音通讯学术会议论文集)。
 - ・喻江(2007) 声调教学新教案 (语言教学与研究), (1)。
 - ・曹文(2007) 赵元任先生对汉语声调研究的贡献 (世界汉语教学), (4)。
 - ・毛丽(2007) 声调偏误与对外汉语声调教学研究综述 (湖南第一师范学报), 7, (2)。
 - ・唐玉萍(2008) 对外汉语教学中的语调教学 (当代教育论坛(学科教育研究)), (6)。
 - ・梁敏(2008) 字调 变调 语调 - 论对外汉语声调教学的三大阶段 (新西部(下半月) 教学改革)。
 - ・关英伟(2008) 对外汉语语音教学的盲点 - 试论朗读教学在对外汉语语音学中的作用 (桂林师范高等专科学校学报), 22, (3)。
 - ・刘佳平(2008) 日本留学生汉语双音节词声调偏误调查报告 (商业文化(学术版)), (3)。
 - ・杨睿(2009) 声调偏误与对外汉语声调教学研究之我见 (语文学刊(外语教育与教学)), (9)。
 - ・叶亚仙(2009) 对外汉语初级班的声调教学 (中国教育研究论丛)。
 - ・彭茹·刘珊珊·赵斌(2009) 对外汉语声调教学探讨 (百色学院学报), 22, (6)。
 - ・宋益丹(2009) 对外汉语声调教学策略探索 (语言教学与研究), (3)。
 - ・耿光怡(2009) 对日汉语语音教学中的几个问题 (冻疆学刊), 26, (2)。
 - ・易斌·梁浩(2010) 作为第二语言的汉语声调习得研究回望 (天津大学学报(社会科学版)), (2)。
 - ・李红霞(2010) 基于日汉语语音偏误的若干课堂教学原则 (天水师范学院学报), 30, (3)。
 - ・田靓(2011) 影响留学生语音意识发展的因素 (云南师范大学学报(对外汉语教学与研究版)), 9, (1)。
2. 日本
- ・藤原輝三(1968)「中国語のアクセントと日本語のアクセント - 声調教育についての私見」『愛知学院大学論叢、一般教育研究』, 16, (4), pp.835-845.
 - ・長谷川良一(1978)「日本の学生の中國語發音習得上の困難點」『早稲田大学中国文学研究』, 12.
 - ・張耀雄(1981)「中国語の声調について」『専修人文論集』, 26, pp.157-184.
 - ・尹景春·孟丹(1991)「關於漢語四声声調模式圖的新設想」『中国語学』, 日本中国語学会, 238, pp.163-170.
 - ・高村麻美(1993)「通信教育における中国語發音學習指導(1) - 發音學習教材と単音節声調の誤読狀況」『桜美林大学中国文学論叢』, 18, pp.244-231.
 - ・秦莉芳(1993)「中国語の声調 (tones) の重要性」『金沢経済大学論集』, 27, (2), pp.67-75.
 - ・高村麻実(1996)「通信教育における中国語發音學習指導(2) 二音節声調の誤読狀況」『桜美林大学中国文学論叢』, 21, pp.152-139.
 - ・鈴木義昭(1996)「中国語發音指導の一方法 - VT法を応用して -」

- 『早稲田大学中国文学研究』, 22.
- ・ 銭剛 (2002) 「短大生に対する中国語教育」 『鳥取短期大学研究紀要』, 46, pp.85-88.
 - ・ 胡玉華 (2003) 「中国語の声調学習における指導法の一案 - VT 法による単音節・2音節・3音節の声調学習」 『駒沢大学外国語部論集』, 59, pp.53-73.
 - ・ 胡玉華・宇野忍 (2005) 「日本人の中国語初学者に声調学習を援助する際の効果的方法に関する研究：構成法的な仮説検証法を用いて」 『教育心理学研究』, 53, (4), pp.541-550.
 - ・ 塚本尋 (2008) 「日本語母語話者への中国語声調指導 - 中国語発音指導法試論 (4)」 『杏林大学外国語学部紀要』, 20, pp.207-214.
 - ・ 齊藤遥 (2010) 「学習者音声の中国語声調第2声の母語話者主観評価に影響する音響的特徴」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』, 56, (2), pp.229-241.
 - ・ 野田雄史 (2011) 「入門期の中国語教育における発音習得の三つの要点：声調・韻母・声母について」 『中国文学論集』, 40.

注記

：中国で発表された文献、（ ）：中国で出版された著作あるいは学術誌。

「」：日本で発表された文献、『』：日本で出版された著作あるいは学術誌。

Connections Among Auditory and Visual Images in the Teaching of Four Basic Chinese Oral Tones

Tomoyoshi Takemura

Abstract

This article proposes a new theory of L2 acquisition that nonnative speakers of Mandarin Chinese could practice as techniques for expanding their tonal range in the target language. Monosyllabic words articulated in textbook CDs as well as in live radio broadcasts served as media for in-depth voice analysis. The author isolated the basic pitch range (the width, the upper and the lower) for standard Mandarin, closely examined the basic tones, and has concluded that an effective technique connects Chinese auditory phenomena to concrete visual phenomena.